

様式第3号

議 事 録

会議名		令和元年度川西市総合教育会議(第2回)		
事務局(担当課)		企画財政課		
開催日時		令和2年2月20日(木) 16時00分から17時30分		
開催場所		川西市役所 4階 庁議室		
出席者	委員	川西市 越田市長 川西市教育委員会 石田教育長、服部委員、坂本委員、治部委員、佐々木委員		
	関係職員	松木総合政策部長、若生教育推進部長、中塚こども未来部長		
	事務局	総合政策部企画財政課 今岡課長、有村		
傍聴の可否		可	傍聴者数	6人
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由				
会議次第		1 開会 2 議事 教育課題への取り組みについて 3 その他		
会議結果				

会議経過

発言者	発言内容等
事務局	<p>それではただ今より、令和元年度第2回川西市総合教育会議を開会いたします。</p> <p>開会に当たりまして、総合教育会議の主宰者であります越田市長からごあいさつをさせていただきます。</p>
越田市長	<p>皆さん、いつもありがとうございます。本日は、第2回目の令和元年度の総合教育会議であります。日頃、教育委員の皆さまにはそれぞれの専門性を活かして、さまざまなご提案をいただきありがとうございます。特に佐々木委員は、初めて総合教育会議に参加され、緊張されているかもしれませんが、現場で皆さんが感じていることをおっしゃっていただければと思います。</p> <p>私自身市長として、今回2回目の予算編成をしました。予算編成は市民の方からは信じられないくらい長い期間かけて作成しています。夏頃から取り組んでいますので、今年の予算は、私にとって初めての実働予算ということになります。教育分野、特に支援の必要な子どもたちへの費用は、ほとんどの予算が教育委員会から計上されてきます。</p> <p>色々な課題があり、私としても悩んでいるところがあります。この場で具体的なお提案、また意見交換ができればと思っておりますのでよろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>ありがとうございました。</p> <p>これよりの会議の進行につきましては、越田市長にお願いしたいと思えます。</p> <p>市長、よろしくお願いいたします。</p>
越田市長	<p>ありがとうございます。</p> <p>それでは、今回のテーマ「教育課題への取り組み」から、「妊娠期から切れ目のない子育て支援の在り方について」と「地域と学校との連携・協働について」それぞれ議論していきたいと思えます。</p> <p>1点目につきまして、教育長よろしくお願いいたします。</p>
石田教育長	<p>「妊娠期から切れ目のない子育て支援の在り方について」には2つの柱があると思えます。1つ目は、子育て支援について坂本委員と佐々木委員から、実際に子育てをされてきた中で感じられたことについて、2つ目は、特別な支援を要する児童・生徒への対応について治部委員からご提案いただきたいと思えます。</p> <p>では、子育て支援について坂本委員、問題提起よろしくお願いいたします。</p>

発言者	発言内容等
坂本委員	<p>子育て支援の現場に関わり、いろんな親子を小さい時から大きくなるまで見る人が多いのですが、その中には、集団となった時、しんどさが見えてくる子がたくさんいらっしゃると思います。そのような子たちは、乳幼児期や小さい時から、何らかの生きづらさだったりしんどさがあります。乳幼児健康診査の時に見つけてもらえたらいいけれど、そうではなく、なんだかしんどいなと感じた時に相談できる場が少ないと思います。乳幼児健康診査で引っかかったとしても、幼稚園、保育所、小学校との連携が出来ず、親御さんが子どもの状況を園や学校に伝えないといけないという難しさがあります。また、集団に上がって初めてしんどさが見えてくると、もっと早い段階で乳幼児期のしんどさを救ってあげていれば、その子自身のしんどさが少し楽になった状態で幼稚園や小学校に上がっていけるのではないかと思います。連携を考えた時に窓口を1つにしてしまう。子育てしんどいです、と伝えられる場、ここに伝えれば、どこかに繋げていける窓口があればと思っています。</p>
佐々木委員	<p>今のお話の連携が必要であるとか、ワンストップでこの窓口に相談すれば自分の悩みが解決する場が必要と考えています。その理由としましては、すごく若くして、未成年で子どもが生まれたお母さんが、小さい子を抱えて自分の問題もそうですし、支援が必要なお子さんがいた場合は、お子さんについての問題も様々な大きな問題を抱えています。原因として例えば、配偶者のDVなどいろいろなケースです。恐らくそういった若いお母さんは、私たちのような年代で集められる情報を持っていないので、どういった相談窓口があるかも知らないことが多くあります。子どものおばあちゃんにあたる方が法律事務所に連れていったり、本当に困って生活保護を受給するところまで考えて市役所の方と一緒に相談にきたりします。そういったことも、もう少し早く来てくれていればもっと他にも選択肢があつたのにという場面が何度もありました。そういった意味で、早い段階で問題の根を拾ってあげることが必要ではないかと思っています。</p>
越田市長	<p>今回、佐々木委員にとっては初めて、私自身も3回目の会議ですが、普通は式次第があり、これ読んでやりましょうという会なのですが、そういうものなしでしましょうと教育長からのご提案がありましたので、フリーなディスカッションが出来ればと思います。こういった問題提起に対して、こども未来部も含めて現状の取り組みなど改めてご紹介していただければと思います。今の声を聴いて課題を感じるころがあればお願いします。</p>
中塚部長	<p>こども・若者ステーションいわゆる児童福祉部門を担当する部門が、子育て世代包括支援センターという厚労省の定める母子保健のキーステーションを担っています。多くは母子保健を担当する、本市で言いますと健康増進部の保健センター、母子保健を担当する部門が担うところが多いのですが、私どもは児童福祉部門でもっており、子育ての基本的な世代についての支援は保健センターでもっています。その中で生きづらさ、困難を抱えた方、子育てにしんどさを抱えた世代については、こども・若者ステーションで重点的に支援しております。この2つを合わせて子育て世代包括支援センターとして取り組みを行っております。従いまして早期発見というの</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>は、乳幼児健康診査を100%に近い受診率を目指して、まず保健センターの保健師を地域割りにしてコンタクトをとり、そこで地域担当の保健師が生きづらさをもった、しんどさをもったお子さんについては、重点的にこども・若者ステーションに報告します。将来的には、虐待とか悲惨な事象などにつながらないように、提案していく取り組みを川西市ではしております。従って、こども・若者ステーションのPRがもっと必要であると感じています。市では、母子保健事業と児童福祉部門の一体的な事業運営ということから、切れ目のない子育て支援を川西市として目指しているところでございます。</p> <p>ありがとうございます。それぞれ同じような切り口から2つの論点があると思います。坂本委員からいただいた部分は、育てている基本的に親御さんが子どもに支援が必要だと思った場合であれば、支援に繋げていくことはおそらく、すでにあるだろう。ただ、そもそも支援が必要かどうか分からないけど、「なんとなくしつけが上手くいかないな。なんとなくこの子は友達と上手くやってくれないな。」「幼稚園に行ったら、先生に少し注意をされているな。」、このような事例を坂本委員はたくさんお感じだというふうに思いました。治部委員から「特別な支援を要する児童生徒への対応について」にもさっそく繋がることになるかもしれないですが、坂本委員のご提案の中で、今、川西の中で生きづらさを抱える子、しつけのしにくい、育てにくいという環境がある方へ具体的に何が足りず、どういうサポートがあったら生きづらさが解消されるのかをお願いします。</p>
治部委員	<p>まず、人生を通して見ていきたいと思うのがリスクファクタというものです。どれくらい検知できるかという指標があるかは把握していませんが、そこをまずははっきりさせるというのが1つの判断だと思います。というのもOECDでも、リスクファクタが何であるかがはっきり言われていて、リスクファクタが多ければ多いほどその子どもたちが生きづらさを感じるリスクが高くなり、保護者が育てにくいと感じるリスクが高くなるといわれていますので、そこを1回整理してみるとというのは1つの考え方だと思います。そうすると、誰にとっての支援が必要なのかということがはっきり数値的にイメージできそうな気がします。OECDの観点でいうと、ABCリスクファクタが公衆要因と環境要因、学校要因と3つにわけてそれぞれカテゴリーがあるというふうに言われていますので、その辺を共有した方が良いと思います。</p>
越田市長	<p>リスク要因をそれぞれ引き出しましようとなった時、どういう形で何を引き出せばいいのか知見がなく、経験値もないのでご提案があれば教えて下さい。</p>
治部委員	<p>今ここに表がありますが、列举してみると個人病院の中には発達障害とか知的な遅れや気質、気質というのは発達とは関係なしに、生まれ持ってハッピーベビーかいらいらベビーなどに分かれるが、アレルギー、低体重の出産、後は家庭内の中には保護者の精神疾患や低学歴、離婚歴、兄弟の多さ、貧困、外国人など、ほかにも色々ありますが、この辺からどうやって見ていくのかなというところですよ。1歳児、1歳</p>

発言者	発言内容等
坂本委員	<p>児半、3歳児健康診査で、かなりピックアップできそうですね。</p> <p>だいぶ丁寧にみられていると聞いているので、やっぱり今後子育てしにくいなという子どもは、言い方が悪いですけどピックアップされていることも多いので、本当に健診というのはすごく大事だなと思っています。普段の生活の中で、こういうところに行ってくださいとご案内されたとしても、心配な気持ちをフォローできるような場所であっても、なかなか外に出ていけない親御さんもいらっしゃるの、アウトリーチという形で訪問する等、いろんなやり方があるかと思います。</p>
越田市長	<p>アウトリーチの必要性も含めてリスクをある程度、健診の中で行政としては把握をしていく。その後の紹介をした功績がどうなっているのか、行ってくださいねと言った後のフィードバックがどうなのか、もし行っておらず幼稚園その先につながっていないとしたら、そこに対するアウトリーチをどうするのかというご提案だと思いますが、どうですか。</p>
中塚部長	<p>紹介をして終わりとなると、行かれているかどうかわかりませんし、その子の指導を受けた後の親御さんの心情とか、子育てにどう活かしていくかを確認しないと支援が切れてしまうこともあるので、基本的に地域担当の保健師が後追いをしていきます。少し気になるところについては、こども・若者ステーションで毎月「りすちゃん会議」を行い情報共有して、しっかりフォローしていく体制はあります。こども・若者ステーションができて1年半が経ちますが、そういったところを重点的に行っていく新しい役割を担ったステーションということで担当職員は取り組んでいます。</p>
越田市長	<p>お話を聞いている中で、アウトリーチをするにしても相談をするにしても、相談者との信頼関係をどう作っていくかが、非常に重要だと思います。私自身も選挙のマニフェストで、子育てコーディネーターが必要ではないかと。コーディネーターだろうがケアマネージャーだろうがなんでも名前にはこだわりはありませんが、イメージとしては産前の時からしっかりと人間関係を作って相談し、出産を終えてある程度立ち上がりをして、きちんとうまくいっている場合はいいですが、常に相談ができるポジションが必要でないかというお話させていただいています。今回、地方創生総合戦略にも令和4年度を目途に実証していきたいところです。ただ、いわゆる日本版ネウボラみたいなのがいいのか、そこはまだ我々の中で詰めきれておりませんので、ぜひその辺に関してはこれからもご意見を頂きたいなと思います。</p> <p>一方でさらに深い課題を抱えられている、未成年だったり、そもそも相談する場所があることが判らない方への支援、ステーションや子育て世代包括支援センターに届いていない方に対してどうしていくのかが別の意味で大きな課題だと思います。</p>
中塚部長	<p>子育てコーディネーターですが、令和2年度中に検討して、始めるという宿題をいただいております。それぞれの職員が、その方々の抱えるしんどさを親身になって考</p>

発言者	発言内容等
	<p>えるスタンスを少しでも見せることができたなら、信頼して足を運んでいただけないかと考えています。建物を建てていただいても、職員の温かさが伝わらないと足が向かないです。マンパワー的にもしんどいところもありますが、部門がまたがって子育て世代包括支援センターとして看板掲げておりますので、そういう意気込みで取り組みたいと思います。</p>
治部委員	<p>アプリを使うのも1つの考えだと思います。預かり保育アプリがアメリカで流行して日本に入ってきました。出張に自分の娘を連れて行った時に、アプリで「何月何日この地域」で検索したら、託児員を呼ぶことができます。同じような形で、レフネックで子育てを学んでいる方たくさんいらっしゃるの、そういった方が地域で活躍できる場を、留守児童を解消するために施設を作るという視点ももちろん大切ですが、ひとりひとりがつながっていくアプリを作ってみるのはどうですか。</p>
坂本委員	<p>それでしたら、ファミリーサポートセンターは地域の人が近所の子どもさんを預かるというシステムがあるので、そこをアプリ化すると、若いお母さんがアクセスしやすいと思います。30分お話し聞いてとなるとセンターまで行かないといけないというハードルの高さがあるので、もう少し簡単にアクセスできるようなやり方はあるのではと思います。</p>
石田教育長	<p>教育委員会内部の課題でもありますが、場面場面では相談することができます。継続してみていき、継続することによって信頼関係が生まれてきます。ところが、場面場面で違う相談員になることが、難しい課題になります。例えば、今はこども未来部から学校教育に行って、社会教育とつながりますが、さらに福祉や健康と他のところへ今後結び付けていかなければならないと思います。継続的な接し方がなかなかできていないことと、その時の情報がどれだけ共有化されているか、というところが課題になっております。家庭的なしんどさや子どもの支援のしんどさというのは、根っこの部分は割と共通しているところがあります。それが切り口の場面によって、全く違う情報となって収集されている事態に対処し、妊娠期からどう継続していくか考えています。会議自体はたくさんありますが、どこまで共有したら本当に実効的な会議になっているのか難しく思います。自分自身も反省しますが、向こう側からつまり、市長部局や教育委員会からみたときの部門の切り方が、相談する側からみたときに分かりにくい構造になっているのかと思います。逆にご提案いただいて、教育委員会内部の組織も整理していかないといけないと考えています。</p>
越田市長	<p>両方の面から私たちは見ないといけない。組織として1人の情報をどのように共有をして、子どもを真ん中において考えていくのか。もう1つ、アプリのようにたくさんある子育てに関する情報を子育てしている側が、アプリでどのように集めていくのか。これは両輪で考えていかないといけないなと思います。</p> <p>実はアプリ問題というのは、総合戦略を作る中で一番大きな目玉であり課題であります。どういうことかといいますと、子育ての議論をするとやはり、アプリを使った情報</p>

発言者	発言内容等
治部委員	<p>共有の話が出ましたが、イベントを考えるとか街中の活性化の話にもアプリが必要と言われ、人材マッチングにもアプリが必要となり、市内がアプリであふれかえってしまう。今度は、アプリの縦割りが起こるので、一本化するべきではないか。しかし、一本化するとホームページとどう違うのかという話にもなります。</p> <p>今、子育てアプリに関しては、事業者を新たに募集しているというところ。名前をどうするかという話では、当初は母子手帳みたいなものを「親子手帳」にして父親にも関わってもらおうとしました。しかし、親ではない場合もあります。それでは、「親子手帳」はよくない。名前も含めて子育てアプリについて議論しています。非常に重要な2つの一本化、一体化を私たちはしていかないとはいけません。子育て世代包括支援センターが縦割りとなり、部署によって相談が別事になっている印象があるというのは課題として感じましたので、組織の形も含めて来年度1年間、教育委員会内部でも議論していただきたいと思います。</p> <p>未成年での妊娠となると市だけでの対応は難しいかもしれませんが、産婦人科との連携も考えていかないとはいけません。特に、望まない妊娠をされる方に対して、孤立してしまうことがありますから、そこも含めて検討、様々なご提案が頂けたらと思います。</p> <p>2つ目の特別な支援を要する児童生徒への対応について、リスクファクタの話から入っていただきましたが、また引き続きご提案・問題提起いただきたいと思います。</p> <p>1つ気づく点は、教育現場での特別支援教育と、課外活動が福祉的な役割の方たちの特別支援への教育というところを考えたとき、特に福祉的な視点の方たちに対するエビデンスの要素を常々考えます。私は、教育も福祉もエビデンスがほしいと考えます。福祉は元々エビデンスが少なくいいという概念で始まっているのかもしれませんが、もしかしたらその人のなりたいた自分をサポートするというのが福祉の在り方なのかもしれませんが、ただ福祉支援教育を考えたときにその子の発達が今どういう状況なのか、脳機能がどういう状態なのか、そこからクエスチョンをたてて、教育のプランニングを立てていくというのが福祉支援教育のすごく大切にしたいコアな部分です。例えば、先日ある学校にコンサルテーションに行きましたが、そのお子さんのことを学校の先生たちは「怠けている」と初めに一言おっしゃいました。この子は、怠けているからこういう問題行動が起きるのだとおっしゃったので、もう少し違う脳の視点から考えてみませんかと言いました。そこから、脳の説明とか感覚特性とかを話していくうちに、逃げてきたのはわざとじゃなかったのかもしれないと言って落ち着きました。やはり、脳機能やエビデンスをもう少し重要視した教育を入れたいというのが一番大きなステージです。そのために何をするのかは、これから考えていきたいと思っています。そうするとやはり1つキーワードとしては「学びの多様性」というものが浮かび上がってくると思います。よく日本の教育は、先生が発問して生徒がそれに答えるという仕組みで、その後先生が「そうだね」、「そうだね」と言ってこのやり取りで物事が進んでいくというある程度概念が出来上がっているといいますが、そこを少し崩してみた時にどうなるのだろうかとは私と考えています。それがキーワードとして「アクティブラーニング」というものなのではないかなと思っています。個の学びは多様であっても良い、人の脳機能は全員が違う、英語で「ニューロダイバーシティ」というキーワードになっているのですが、そこからクエスチョンを始めたら特別支援がもう少し見えてくるような気がします。</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>現在の教育風景は、ツールは変わるかもしれませんがタブレットが増え、先生が中心となって「はい、これ分かる人」と言って子どもが答える。少しずつ形は変わってきているけれど、大本は変わっておらず、私が子どもの時とあまり変わらない風景のように思います。そこについていける子たちはついていけますけど、最近はいろんなスピードで学びたい子たちがいると思います。昨年からの課題ですが、今の川西の教育の中で、何から始めるべきだと思いますか。昨年頂いたとき、教職員への研修も含めたことが必要ではないかとお提案がありましたが、現時点でその後、新しい取り組みや教育現場での課題になっていることはありますか。</p>
若生部長	<p>学習指導要領が変わることに伴って、教師主導の教え込みの授業から脱却するため、問題解決にはプロセスを意識したものが必要になる点を教職員研修の方で少しずつ紹介していきシフトはしています。まだまだ具体的な指導方法の共有化をする必要があります、まだまだ時間はかかるなと思います。</p>
石田教育長	<p>みんなが一斉に同じスピードで同じ内容をするのが今までの学校教育で成り立ってきたわけですが、それを根底から揺るがすような学習指導がないといけない。そういう意味では、タブレットは1つのツールではありますが、個に対応しやすいツールです。個々が自分のスピードや興味をもって使うことができる。それが私は非常に大切だと思います。もちろん教員がタブレットの研修をしなければいけないけれど、なによりその準備をすることで走りながら研修していくことが大事だと思います。もう1つは、幼児教育です。幼児教育の視線と学校教育の視線が全く違います。一見、自由そうに見える幼児教育ですが、子どもの主体性を大事にしており、子どもの興味を大事にしています。それを学校教育は学ばないといけないけれど、どちらかという幼児教育を軽く見ているようなところがあります。その異校種がある教育委員会の特徴を生かして異校種による研修を進めています。教育委員も言っていました、教育実践発表会で異校種の交流が出来て、すごくお互いに学びになっている。交流がお互いの学びになっているのではないかと思います。</p>
越田市長	<p>新しい試みをしているのが、まさに川西の教育委員会の良さです。幼稚園、保育園と学校両方を持っていると教育委員会にとっては、大きな負担部分かもしれませんが、子どもを真ん中に置いたときにいい結果に結びつくのではないかと思います。子育て全体の話で、私も同じ子育て世代ということで先にお話を聞きました。今までの議論を聞いて、服部委員から感じるどころや我々に対するアドバイスがありましたらお願いします。</p>
服部委員	<p>治部委員がおっしゃったニューロダイバーシティ、我々の世界では、バイオダイバーシティ=生物多様性と言います。生物多様性の概念からすると、子どもたちをどう評価していくかという、それぞれの子どもの個性を高く評価します。だから、勉強で</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>きる子もいますし、できない子もいます。けれど、それはそれぞれの個性だと考えます。兵庫県の生物多様性の戦略の中では、学校教育の中にも生物多様性を導入しようという概念があります。ただ、学校の先生に生物多様性といっても誰一人として理解してもらえません。そういう概念が、これから必要になってきます。多様性と言うところでは、どことも共通する内容かなと聞かせてもらいました。</p> <p>私としても、ダイバーシティ=多様性は、行政全般に言える事だと思います。カテゴライズするのではなくて、全員にとって生きやすさやいろんな価値を認めていくなど、そこに対してはこだわっていきたいなと思います。</p> <p>あとは、私自身も実際にタブレットのセンシティブを行っている緑台小学校に行きまして、支援が必要な子どもが今までできていなかった九九を、他の子どもより早くできるようになった姿を見て、非常に可能性を感じる一方で、それぞれの特性にもよりますが、集中しやすい環境を作りすぎたり、正解が出たら○と非常に分かりやすいけれど、○か×が大切なのではなくて、そこに至る経緯や考え方が学びとなり重要なのではないかと思います。使い方によって、プラスにもマイナスにもなる。現場の教職員が抱える責任が大きくなると思います。それに対しての具体的なアドバイスや教育委員会として、支援の必要な子どもだけではないですが、新しいものが出てきたときの対応などありましたらお願いします。</p>
治部委員	<p>発達心理学の視点からいうと、OECD や国立教育政策研究所も言っていますけれど、学力を1個ずつ積み上げていけばその学力自体が伸びていくかというところ、そこはクエスチョンがあるそうです。何かしら認知的なスキルと5教科のスキル、否認知的なスキルの組み合わせでその学力を5～10分勉強したところ、5分もしくはそれ以上にどんどんどんどん上っていくとはっきりと言っています。iPadでした○×正解の問題が非認知スキルの成長につながるかどうかを、確認したいのです。非認知スキルという、対人スキルや実行機能の影響に代表されるような情動のブレーキであったり、思考の柔軟性、ちょっと考え方を変えてみようとか、メタ認知とかが大切なのであって、アイパッドでの学習には非認知という側面では限界があるかもしれません。</p>
越田市長	<p>坂本委員、タブレットの教育、子育てのところでご意見がありましたらお願いします。</p>
坂本委員	<p>大津市の小学校に視察に行かせていただいたとき、タブレットPCで教育をしていたのですが、考え方は自分たちで考えて、それぞれの考えが画面に出ていろんな考え方があることも勉強できます。例えば3～4種類考えた子は、自分はこのように考えたプレゼンするような授業をされていたので、使い方次第かなと思います。○×だけではない考え方を形にして、みんなに見てもらおうとすることで、非認知スキルが上がってくるのかもしれないし、使い方次第と感じました。先生たちは忙しいですが、やっぱりタブレットの研修は大事かなと思います。</p>

発言者	発言内容等
佐々木委員	<p>タブレットを普段からゲームなどで機器に慣れている子は、うまく使いこなしたり、慣れることは早いと思いますが、そうではない子、今まで機器を家庭で触れていない子が、学校でタブレットを始めた時に、どういった差ができるのか、その差をどうカバーしてあげられるのかが個人的には気になります。</p>
越田市長	<p>一部の小学5年生、6年生、中学1年生がこの10月からタブレットを配置していきますので、現場の方でどういうふうな状況なのか、教育、事務局と現場の教職員の皆さんとディスカッションをして頂いて、よりよい効果を出していくことに繋げていくことが出来ればと思います</p> <p>2点目の「地域と学校の連携・協働について」というところで、教育長お願いします。</p>
石田教育長	<p>以前から市長にお話しさせていただいています、学校運営協議会いわゆるコミュニティスクールという言い方をしますが、本市でコミュニティと言いますとまた別の単位を表しますので、学校運営協議会という名称でモデル校をたてて取り組んでいるところです。今までにも学校評議員や、いろいろな方が学校教育に参画することはありませんが、モデル校の学校運営協議会はもう少し違った視点で進んでほしいと思っています。まずは、参加している人たちの当事者意識です。やはり、どこかを評価して、学校教育を評価するのではなくて、同時に自分たちも評価を受ける存在であることを意識してもらいたいです。実働組織として提案するだけでなく、提案したことを具体的に形にさせていただくのが委員の取り組みであると思っています。私は教育に携わっていますので、人と人のつながりを学びでつなげたいです。これからの学校の在り方、地域の在り方は、学びを確保した地域のネットワークになるのではないかと思います。そのために、学校という大きな組織が使われていくのではないかと思います。そうすることによって、市長が問題提起されていたように、学校が閉ざされた古い形のものから、地域の意見や保護者の意見を受け止めるものになると思います。この後、服部委員もご提案いただきますが、地域の自然を守っているNPOの方たちがおられます。その方たちの今後の活動と、子どもたちの学びが上手に連動していく形をコーディネートするのが学校運営協議会だと思います。</p> <p>先進地を見学に行ったときに、非常に印象的だったのが、学校の中に運営協議会、地域学校協働本部という活動する場がありました。そこに、ベビーカーを押して参加されている人がいました。学校教育が子育てという拠点にもなっていたり、いろんな地域の販売をしてファンドを立ち上げていたり、これからの学校がハードにもなるし、学びのソフト面の中心にもなっていく。こういうことが大事だと感じましたので提案させていただきます。今申しました、地域の自然や人材を活用した体験学習については、服部委員からご提案いただきます。</p>
服部委員	<p>総合戦略を見ると、やはり人口問題が多く、その中でも特に転出が多い。今、北陵高校の評議員をしまして、校長先生のお話を聞くと、学校の定員を3つの高校の全てで満たしていない、南に子どもたちが行ってしまっておっしゃっていました。</p>

発言者	発言内容等
	<p>たくさん選択肢が出来て、どこの高校に行ってもいいじゃないかという 1 つの意見もありますが、子どもたちが故郷の川西市に意識をあまり持っていないのではないかと思います。考えてみると、川西市には日本一の奥山、里山、まち山という自然があります。自然があるだけだと、それだけで終わってしまいます。教育長が言われたように、人材が非常にすごいのです。自然関係の団体だけでも、十幾つあります。例えば、伊丹市は 1 つしかありません。三田市や宝塚市と比べても、川西市は圧倒的に団体が多い。その団体が自然を守っているのですが、ただ自然を守っているだけではなく小学 3 年生、4 年生の体験学習を受け入れてくれています。体験学習は全国で兵庫県が一番進んでいまして、兵庫県下で動いています。小学 3 年生をほかの地域を見ても、指導者がいないので、あまり上手くいっていません。川西市の場合、全部が全部ではないのですが、非常に上手くいっています。そういう人材、NPO があっての自然保護であり、これはすごいことではないかと思います。そういう利点をもっと川西市は活かした方がいいと思います。第一は、川西市に素晴らしい自然があると川西市の職員はあまり知りません。これだけは、市長にお願いしたいですが、ぜひ市の職員の方に講演させていただきたい。どれだけ川西市の自然が素晴らしいのか、それは世界に恥じないものである、それだけの資産がある。その資産を子どもたちに伝えたい気持ちがあります。</p>
越田市長	<p>ありがとうございます。やはり川西の素晴らしさというのは、大阪への近さと利便性、自然、住環境としての価値に加えて、地域で様々な人が活動して、地域いわゆるコミュニティ組織もそうですし、自然で実際にワークをされている様々な活動団体だと思います。今回、川西市民会議という無作為で選ばれた 160 名の方にお話を聞くと、興味があるけど実際にまだ活動に至っていない。160 人集まって市に対して意見を言おうと言っている方の中で、自治会に入っていない方もたくさんいらっしゃいました。ということは、川西にはまだまだ掘り起こせば人材がたくさんいることを、私は実感しました。学校運営協議会という 1 つの大きなところと、もう少し大きな川西市全体のことで 2 つ意見を頂きましたが、例えば川西市の運営協議会をすることについて、実際に進めていくうえで教育が抱えている最大の課題に対してご意見を頂きたいと思います。また坂本委員には PTA など地域活動をされていますので、サポートしてきた側からみて、今の学校現場や地域との関係を含めて課題で感じていることがあれば、ご意見を頂ければと思います。</p>
坂本委員	<p>時代の流れで、保護者の方がお忙しくなってきたので、PTA が今まであった形で続けていくのは難しい状況であると思っています。例えば、一保護者として「学校運営協議会が始まりましたよ」と言われても、「そんなのが始まったのだな」ぐらいのニュアンスで一般の方は思われているのではないかと思います。地域の方々も人材不足で、いろんなことをしようとなっても人が足りない。保護者も人が足りていない。というところで、学校運営協議会を立ち上げたところで、やはり難しい所があるのかなと思います。しかし、保護者としてというより、地域に住む 1 人として近くにある学校をどうしていくか自分の意見を言える場があることを知ってもらうことが大事だと感じています。</p>

発言者	発言内容等
石田教育長	<p>学校運営協議会の一番の課題は、具体的なイメージが持っていないことです。学校現場も運営協議会の委員もすごく意欲は持っておられるのだけど、何をしたら良いのかという感じです。今、学校の教育活動のサポーターをコーディネートする人は、学校の管理職がコーディネートしています。しかし、いろいろな地域の人材については、地域の方の方がよくご存じです。上手にしている地域をみると、必ず運営協議会と地域学校協働本部が共同で行い、地域の人材をゲストティーチャーで入れたり、子どもの放課後活動をコーディネートしたりしている。そこが大事なかなと思います。昨年も言われていた PTA という形も、ある意味で学校のサポーターであったわけですから、そういうところに組み込まれていくというのも 1 つの考え方なのではないかと思います。教員にとっては多忙な中で、負担感というのは大きいと思います。ただ、そこを任していくようにしていかないと、いつまでたっても教員がやっていかないといけない。こういう先生が欲しいという時に、学校運営協議会がコーディネートして、「ミシン教えるのであればこういう人いますよ」と繋いでいけば、教員にとっても負担感が少なくなっていくと考えています。</p>
越田市長	<p>ありがとうございます。人材の掘り起こしと学校現場の困りごとの掘り起こし、それを結びつけるという部分が、「こういうことをできるよ」とお手伝いしたい人と、学校現場が直の取引となっていて、本当に学校現場にとって必要かどうか判断しづらい。学校現場からすると、地域の方は断りにくい。A さんはいいけど、B さんは駄目。C さんはお願ひ。ということは学校現場としては、困難ではないかと感じています。そこを上手に橋渡しをして、場合によっては地域同士で調整し、最終的には市全域に広げていくイメージをしています。今回、人材マッチング制度という新しいチャレンジをしています。人材を部分で集めるとなると、また縦割りになってしまうので、初めは小さな部分でスタートするかもしれませんが、一緒に乗っていくようなイメージがいいのかなと総合政策部長と何の打ち合わせもなく私は思っています。勝手に言った後で話しくいとは思いますが、お願いします。</p>
松木部長	<p>いろんな人材が、各地域に豊富におられると思うのですが、マッチングというのは、1 つの学校で合う場合と合わない場合があると思いますので、制度設計を柔軟に考えながら実施していこうと思います。</p>
越田市長	<p>コーディネーターの育成と掘り起こしの部分を市として枠組みをどうするかが大きな課題と思っています。川西市教育委員メンバー、もちろん各局から素晴らしい方からご協力をいただいておりますが、私が市長に就任してから、治部委員、佐々木委員 2 人はおそらく地域、組織に加盟していた方ではありませんが、専門的な知見があるという方にそれぞれご縁を頂いてご参加いただいています。服部委員のように、全国レベルの研究者として日本有数の方、坂本委員のように地域で活動されている方、まさにそれが我々の人材力なのだと思います。地域だけに偏ると治部委員や佐々木委員が入ってこない、よそ事のまちになってしまいますし、専門的な方たちだけで行くと既存に活動されていた方たちとマッチングできないことになります。教育委</p>

発言者	発言内容等
	<p>員会でのこういうものがそれぞれの所でできれば、非常に良い形になるのではないかとイメージしています。新たなチャレンジでもありますので、全部でいきなり成功させるというよりも、1 つずつ行い評価を受けて、直すべきところを直して一歩ずつ広げていくというイメージと一緒に共有できればなと思っています。市長部局としてもしっかりやっていきたいと思います。服部委員からは、まずは職員への研修だと、職員の研修も含めてですが、研修をお願いするか少し検討させていただきたいと思います。</p> <p>非常に重要だなと感じたことが、里山日本一をどう表現するかが一番の課題だなと思います。富士山はどうして日本一かというと、一番高い山だという絶対的な価値基準があります。ただ、日本一の里山といったときに、日本一の里山の説明が歴史的にとかいろんな要素があつてということの説明が長ければ長いほど、共通言語にはならないという悩ましさを感じていました。先日、先生のご講演で、日本最後の里山、唯一の里山という表現がありました。日本一よりも唯一、最後と表現すれば、「1 位だったら 2 位があるのでは」、「2 位との差は何か」と疑問視されることがないのではないかと感じました。</p>
服部委員	最後の里山です。
越田市長	先生が「最後の里山です」とおっしゃっていただいたので、そうしたら希少価値が日本一より高くなるのではないかと思います。
服部委員	結局、今まともに里山を使っているところはありません。ですから、日本一と言っていますが、世界一でありここにしかありません。それを私は、講演の時に遠慮がちに言ったことが良くありませんでした。ここにしかないともっと強く訴えていればと思いました。前の県民局長から「コウノトリの郷があれだけ有名になっているのに、里山が有名になっていないのはお前の責任になる」と言われたのですが、使われている予算が違うと言いたいのですが、でも本当にここにしか残っていません。環境省でも、国際会議で外国人を連れてきているのは、ここです。それを私は遠慮しないで、強く言うべきでした。非常に深く反省しております。
越田市長	私も聞いていますので、伝わっていないということはありません。教育長として、学校現場において、環境というのは 1 つの柱だということは、常に発信して頂いておりますがどうですか。
石田教育長	里山も自然環境も人材なども大きく言うと、NPO の人たちにとっても、学校教育に携わることによって、保全するモチベーションになります。子どもたちに伝えるために、自分たちも学び続けられるのです。先ほどの話ですが、コミュニティスクールと言われていますが、本当はスクールコミュニティ、逆なのです。学校を中心とした学びのコミュニティになっていかなければならない。その中の 1 つの材料が、地域の自然

発言者	発言内容等
越田市長	<p>であり人材です。もう1つは、市長が今おっしゃった、それぞれに専門的な知見を持っておられる方は、それを発信していかなければいけない。それは、現場の教職員や社会教育にも言って、その辺の知見を活かしていくために、どんどん現場に入ってもらっています。そういう知見をもって中に入ってきてもらうことによって、いろいろな見方が広がるのではないかなと思っています。私自身も意識して、取り組んでいきたいなと思っています。</p> <p>ただ、故郷意識という話もそうですが、私の実感としては爆発的にそれが増えるというものではありません。しかし、じわっと来ているなど感じることもありました。昨年、子どもの自主活動支援事業という子どもに自主活動の提案をしていただき、1次審査の中に面白い提案がありました。小学校の授業の中で、黒川に行って自然と昆虫がいっぱいあり、こんなすごい所があるから、私たちでそれを案内するようなイベントをやりたいとご提案がありました。形にする企画としてまだ未成熟で、なかなか形にできないなという判断がありましたので、実際のプレゼンまでにはいきませんでした。それが終わった後に、応募して頂いた方の中で、希望される方全員とお話をさせていただきました。小学4年生の女の子が3人で来られました。「里山、黒川がすごく楽しかった。これをみんなに知ってほしい。」とずっと切々と訴えておられました。恐らく、先生のお力があったので、ここまで統一的なコンセプトになったのではないかと思います。</p>
服部委員	<p>兵庫県の場合は、小学3年生と5年生の体験学習をやっていますが、ほかの市では4年生の体験学習はありません。その子どもたちがそういう意識を持ったのは、川西市だけが、小学4年生の体験学習を里山で実施している。本当にうれしいです。ありがとうございました。</p>
越田市長	<p>3人仲間を作って自分たちで新しい企画を考えるなどハードルが高い中で企画が出てきましたので、そこまでいかないけれど思っている子どもたちはたくさんいるとは思っています。この成果は、先生の今までのご提案が我々の教育委員会の形になっていると思います。私が市長になり、教育長と川西市の教育の特徴についてディスカッションをした時、幼稚園時代からの環境学習と生涯学習、社会教育、この3つは共有できおり、非常に重要な財産であるとお話しました。あとは、人材の部分は、一遍にとはいかないとは思いますが。子どもとの連携部分も含めて、川西市が里山を一生懸命売り出していることが伝わっているか、佐々木委員が初めて教育委員になられてからこの数か月で、この動きをどう見られましたか。</p>
佐々木委員	<p>里山のことは、市の広報や図書館の展示で川西って里山である認識はありましたが、これほど委員会の中で熱く議論されていることを初めて知りました。であるならば、もっと市民に伝える場、発信できる何かがあればいいなと思います。</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>広報誌で取り上げて、日々発信しているにも関わらず知らない方が多いことに、私たちは非常にショックでした。民間企業でさえ、自分の商品を伝えることを苦勞しているこの世の中ですので、時間はかかるかもしれませんが伝え方を考えないといけません。地方創生の議論の中で、川西市としては人口獲得競争に乗らないという話になりました。川西市で育った子たちが川西で共通の思い出があり、共通の何か大切なものがあり、東京で活躍しているけれど、川西に何かあったら帰ってくるなど、最後は川西がいいよねと同窓会等で集まったときに話せたらいいなと思います。結果人口が少なくなったとしても、川西市民が各地で生活しているという、それこそがこれからの時代の街の生き方だと思っています。そういった意味で、里山は大切なコンテンツであると思います。ただ、名前の売り出し方を日本一か世界一か日本唯一か最後の里山か、最後の里山と言ったことでクレームがくるかどうかは分かりませんが、是非良い表現があればと思うのですが、もし補足がありましたらお願いします。</p>
服部委員	<p>何回も言いましたが、里山というのは実際に使っているところです。炭で焼いているところは備長炭とかありますが、そこは里山を炭で焼くたびに山を崩して消費しています。まともに持続的に使っているというのは、本当に川西だけです。ですので、自信をもって言っていただいても大丈夫です。</p>
越田市長	<p>ありがとうございます。山の景色だけではなくて、炭焼きの文化そのものを守らないといけない。里山という山というイメージから、文化としての里山であるという住民理解を考えていかないと感じました。</p>
服部委員	<p>私たち教育委員会がどうしているかという、例えば市民団体が活動している、エドヒガン群落、シロバナウンゼンツツジ群落、台場クヌギ群落、というのを天然記念物にしています。天然記念物というのは、文化財です。それが地域の文化であり、自分たちは地域の文化を守りながら、子どもたちの面倒を見ていただいている構造を作ろうと思っています。</p>
越田市長	<p>ありがとうございます。打ち合わせがない中、1時間少し議論をさせていただきました。せつかくの機会ですので、頂いた内容はここで終わらせていただいて、日頃の活動の中でご提案を頂くところや気になるところなど、もしありましたらお願いします。治部委員からよろしくお願いします。</p>
治部委員	<p>多職種の連携や異校種の研修、学校運営協議会などこのようなキーワードをどうやって現実に行っているのかと思います。学校の先生と話していて、人材が足りないという声はよく聞きます。学校の先生は、サポートすることが子どものサポートにつながると思っているので、子どもの教育の質や福祉の質を上げると同時に学校の先生をサポートするというのも大きな命題だと思います。人材が足りないのだったらどうするか</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>を具体的にしていきたいと考えます。先生たちからよく私の耳に入ってくる言葉は、「子どもたちの理解が上手に出来ない。どうしてそういう行動をするのか、少し学校の規則から外れた行動をした時にどのようにサポートすればいいのか」を難しいと感じています。アメリカは、行動のセラピストという専門の資格があり、どの学校にもだいたい 1 人います。なので、子どもが少し不安定になったら、「先生来てください」と言っ て、行動専門医が駆けつけてきます。日本では、そういう職種がないので、少し違いますが、学校の教員免許がなくてもできるようにしたり、人材バンクから発掘したり、川西市がオリジナルの教育課程を作って、市が認めた人材を学校に、学校運営協議会の一部として配置できるようなことを勝手に思い描いていました。</p> <p>単に学校の困りごとの人材をマッチングするだけでなく、育てていくところから始めてみたらどうかというご提案でした。行動支援専門医をされる方が、どのような知識と能力が必要か、また新たなご提案として教育委員会の中で取り上げてほしいと思います。</p>
服部委員	<p>先ほどの人材育成の問題で、川西市はレフネックをはじめとして生涯学習の構造が整っています。ところが、生涯学習や公民館の講座にしても自分の教養という形で終わってしまっています。それを誘導して、学校教育の支援という形につながっていません。ぜひとも、多くの予算が使われていますので、学校教育との連携の視点から生涯学習について考えてみたいと思います。</p>
越田市長	<p>社会教育と公民館が横列になっており、組織的な難しさを私自身も感じていますので、また 1 年間、組織議論の中で協議をさせていただきたいと思います。</p>
坂本委員	<p>学校に行きにくい子どもがたくさんいる中で、東谷中学校や川西中学校はフリースペースを設けています。セオリアがありますが、市に 1 つしかないので北部の子が行きにくいです。各中学校に自分のペースで学校へ行けるようなスペースを作れたらいいなと思います。</p>
越田市長	<p>これは大きな課題だと思います。いろいろな公共施設が空いてきて、どうするかという議論の中でも、新しい物を建てるよりも、既存のスペースの中で作るのがいいのかと話し合いました。学校の中に置くか、少し離れた場所がいいのかも含めて、議論をさせていただきたいと思います。</p>
佐々木委員	<p>先日加茂小学校の地形研究で 6 年生の社会科の授業を見ました。空き地をどのように利用するかを子どもたちが考え、最後、市役所の方が説明するという形の授業でした。それは、自分たちの市のことを自分たちが、今決めるとしたら何を大事に思っ て決めていくかという主権者教育になると思います。里山についても他人事で終</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>わらずに、自分たちの意見がどうすれば届くのか、政治と言ったら大きくなりすぎますが、関わるができるのかと学べるすごくいい授業だったと思いました。兵庫県で憲法の出前授業というのををしまして、今年度は把握していませんが、昨年度川西市は、加茂小学校しか応募がありませんでした。そのようなものも、ほかの学校でもうまく使ってもらいつつ、自分たちの住む市を自分たちがどう関わって変えていける可能性があるかを知ってもらうような機会があればいいと思いました。</p> <p>民主主義とは、常に当事者意識をもった市民をどう育てていくか、一緒に作っていくか、教育の最大のある種使命だと思います。中学校給食センターを作った後の川西南中学校第2グラウンド部分をどうするかということ、実際に川西南中学校の生徒会の子たちを中心に議論していただいたということもありました。こういう機会を増やしていきたいと思います。おっしゃっていただいた通り、いろんな各種団体の専門家の方が、教育の現場に行きたいというご提案を頂いていますが、ご提案を頂いたままという傾向にあると思います。そこも、教育委員会のほうで、いろんなご提案を頂いてお手伝いいただける方たちを整理して頂いて、学校現場でチョイスできるようになればと思います。</p>
石田教育長	<p>教育委員会の中の課題として、組織の縦割りの良さとし難しさがあります。それから教育委員会制度という言葉の意味をいつも考えます。やはり教育委員として、それぞれどういう立場で現場に働きかけていただくか、日々悩んでいます。先ほどお話ししましたが、それぞれの知見をもった方が集まられてディスカッションをすることは、刺激的で自分自身の尺度になっていると思います。それをそれぞれの教育の現場で、活かしていきたいと思ひますし、それも含めてご提案できたらと思ひます。</p>
越田市長	<p>シナリオのない中で、やらしていただきましたので、皆さんも突然の私の振りで戸惑われたかもしれませんが、とても良いディスカッションが出来たと思ひます。今後ここでいただいたものを次回に経過を事務局から報告が出来ればと考えています。</p> <p>以上をもちまして、第2回総合教育会議を閉会いたします。</p>

以下会議の事項を記録し、相違ないことを認めたので、ここに署名いたします。

令和2年3月 日

川 西 市 長

川西市教育長